

# 正量部の修行階梯

——見道，修道，無學道——

並 川 孝 儀

## 〔1〕 は じ め に

チベット訳のみに現存する Dasabalaśrimitra 作 ‘dus byas dang ’dus ma byas rnam par nges pa (Saṃskṛtāsaṃskṛta-viniścaya, 『有為無為決択』, 以下, SAVと記す)<sup>(1)</sup>は全35章の中第16章から第21章の6章にわたりその全容が殆ど知られなかった正量部の思想—煩惱論, 業論, 聖諦論—を相当量伝える。

その中, SAV第21章「聖諦決択」は, その大半が『俱舍論』第6章「賢聖品」に対応し, 正量部の修行体系を明らかにしている。有漏道の四善根位説は既に公にしたので, 本小論では無漏道—見道, 修道—と無學道に関してその正量部説を眺める。この正量部説は『律二十二明了論』<sup>(2)</sup>にごく一部だけ認められるに止まり, その他は既存の資料『異部宗輪論』<sup>(3)</sup>とその註疏である『異部宗輪論述記』<sup>(4)</sup>に紹介される犢子部説から僅かに知ることしかできない。その意味から正量部の無漏道説の解明に当たり, それが詳論されているSAVの意義は大きい。

## 〔2〕 無漏道（見道，修道）と無學道説

無漏道について正量部は次のように規定する。

「道は二種説かれるのである。即ち次の如くである。有漏と無漏である。

・・・無漏の道は二〔種〕で, 〔即ち〕見道と修道である。」

(D. 235b7-236a1, P. 168a2-4)

即ち、修行階梯の中の見道と修道を指すのであるが、無漏という概念から見れば阿羅漢果を得た位もまた無漏であるからこの範疇に入るべきであろう。その点は次の記述からもよく判る。

「律儀の戒は、すべて無漏であって、阿羅漢の〔戒〕である。即ち次の如くである。阿羅漢はすべての悪行 (nyes spyod) から還滅するべきである、という如くに心が生じる時、その心と共に八〔種〕の無漏の戒〔と〕律儀が生じるのである。」 (D. 222a6-7, P. 151a1-2)

そこで、本項では見道と修道、並びに無学道についての正量部説を眺めてみたい。

### (1) 見道説

「その〔世第一法〕から上方において何が生起するのか、と言えは〔それについて〕説こう。即ち、その世第一法から連続して修行者が諸諦に随入することから、欲界に属す苦〔諦〕において無漏の法智が生じるのである。」 (D. 233b2-3, P. 165a4-5)

とあるように、有漏道の最上の法である世第一法に連続して苦法智が生起することを以て見道に入ることになる。この苦法智に続いてどのような智が生じるのかについて見ると、

「苦〔諦〕におけるその法智に続いて、類智 (rjes su shes pa) が生じる目的から苦〔諦〕に観察智 (rtogs pa'i shes pa) が生じるのである。それは、また断じるものを見ることで煩惱を能解すること ('jig byed) はないのである。観察智に連続して苦〔諦〕に類智が生じるのである。」

(D. 234a1-3, P. 165b4-6)

とある。即ち、苦諦において先ず法智が生じ、続いて観察智が、そして類智が生じるのである。ここで、法智とは欲界繫の苦諦に属す煩惱を断つ智であり、類智とは色界・無色界繫の苦諦に属す煩惱を断つ智であり、そして観察智は類智が法智に続いて生じる目的から生じるのであって、これには煩惱を能解することはないと規定される。この正量部の三心（智）説は説一切有部における苦法智忍・苦法智、苦類智忍・苦類智という四心（智）説と構造的に相違する。

即ち正量部には観察智という説一切有部にはない概念が見られ、そして忍・智という説一切有部の見解とは異なる点が見出せる。

苦諦における構造は集諦、滅諦、道諦も同様であることから、見道における智は次のように纏められる。

「〔智は〕苦〔諦〕における法智に始まり、枚挙すると道〔諦〕における類智〔までの〕十二である。〔即ち、〕苦〔諦〕における法智と、苦〔諦〕における観察智と、苦〔諦〕における類智、そして集〔諦〕における法智と、集〔諦〕における観察智と、集〔諦〕における類智、そして滅〔諦〕における法智と、滅〔諦〕における観察智と、滅〔諦〕における類智、そして道〔諦〕における法智と、道〔諦〕における観察智と、道〔諦〕における類智である。〕  
(D. 234b4-6, P. 166b2-5)

正量部は四諦各々に三心が生じることから計十二心の生起をもって見道における智と考える。この説に対して説一切有部は四諦各々に四心が生じることから計十六心が生じるが、その中第十六心は修道とされるから見道においては十五心が生起すると考える。このように、両部派の見道の見解にはそこに生じる智に関して相当の相違が見られる。

ところで、正量部固有の概念と見られる観察智に関して若干の問題がある。『異部宗輪論』に犢子部説としてここに挙げた三心説が紹介されているが、そこでは苦法智、苦法忍、苦類智となっている。観察智はこの法忍に対応するものと考えられるが、『異部宗輪論述記発軀』で「これ智の後に在り、欲界苦下の惑の已断を觀ず。この所以は猶上界苦下の惑の当に断じること有るを以ての故に、重ねて欲惑の断・未断を審觀して、以て已断を忍許す。」と、解釈することからも両者は対応するものと見てよい。しかし、用語の上から見ると、両者は同一の語であったかどうかは疑わしい。法忍は *dharma-kṣānti* と想定できるが、一方観察智はチベット語が *rtogs pa'i shes pa* であることから両者の原語が同じとは考えにくい。これは犢子部と正量部における相違を示唆するものところでは理解しておきたい。

観察智は法智、類智と異なり、煩惱を断ずる智ではないと規定されているが、それと矛盾する記述も見られる。SAV 第19章「福決択」において戒が生

じる記述のところで

「苦〔諦〕における法智は、〔三十の煩惱を〕断じる故に、そして〔諦に〕随順する (rjes su mthun pa) 力の故に、戒が生じるのである。それは、また一刹那性であることによって滅すること ('gog pa) になるのである。〔苦諦における〕観察智も、ともあれその如くに生じるのである。即ち、先ず断じる力の故に、そして〔諦に〕随順する力の故に、〔戒が生じるの〕である。」 (D. 222b3-4, P. 151a7-b1)

と、観察智も法智のように煩惱を断じる力と〔諦に〕随順する力の故に戒が生じる、と規定されていることである。どちらが正しいかは断定できないが、『異部宗輪論述記発軀』の解釈などから判断して、ここでは法智、類智と異なり、観察智は煩惱を断ずる智ではないと考えるべきであろう。

## (2) 修道説

見道において道類智が生じ終わった瞬間、修道に入るのである。では、どのような理由で修道に入るのかについて次のように説かれる。

「〔ここでは〕修道が説かれるべきである。もし、〔見道に〕従い修行者が〔四〕諦を見ることを獲得することによって、そのように見所断 (spang bar bya ba) の随眠など輪廻の因を伴うものである欲貪 ('dun pa chags pa) を断じることと、遍知〔によって〕断じることなどの根本がないことによって〔存在する〕ならば、〔そこで〕何をなすのか、と言えば〔それについて〕説こう。有 (srid) において輪廻が回る ('jug pa) ことが、有において苦が回る ことなのである、と知られるべきなのである。即ち、〔修道は〕修所断〔の煩惱〕が輪廻の因であることによって随眠など〔輪廻〕の因を伴うものを断じる故に、〔そして〕見の真実性 (de kho na nyid) を幾度となく勤 (rtsol ba) の相によって修道を行なう (goms pa) 意味から成り立つ (rtsom pa) のである。」

(D. 236a2-4, P. 168a4-8)

ここには、見道において四諦を観察することによって煩惱を断じるのであるが、未だ輪廻の原因となる煩惱が減することがなく残ることによって、その煩

悩を幾度も幾度も繰り返して修習に努めて断じるところに修道の意味があると説くのである。この見解は説一切有部と同様である。

それでは、この修道がどのように説かれているのかを見る。

「ここで、修道は何であるのか、と言えは〔それについて〕説こう。そこで、欲〔界〕に属す諸法を遍知すること (yongs su shes pa), その支が無漏なること, 〔そして〕無常などの相によって作意する (yid la byed pa) 時, 欲〔界〕に属す修所断の煩惱を断つことである。色〔界〕に属す諸法を遍知すること, その支が無漏で, 〔そして〕無常などの相によって作意することにより, 欲〔界〕と色〔界〕に属す修所断の煩惱を断つのである。無色〔界〕に属す諸法を遍知しつつ, 同様に想うことにより, 修所断の三界の煩惱を断つのである。」 (D. 237a3-5, P. 169b2-6)

修道において、まず欲界から色界、無色界に至り、各々に諸法を遍知し、その支が無漏で、無常などの相によって作意することによって各界に属す煩惱及びその下界の煩惱を断じるのである。

修道の構造に関して眺めると、主に四向四果と階位とに関連するために設定されている三界各々における階位に応じた区分に正量部独自の説が見られる。説一切有部説は三界各々が九種、所謂上上品から下下品までの九品に区分され、階位と四向四果などが関連付けられ修行階梯が構成されている。それに対し、正量部は三界を九種ではなく十種（支）に区分し、四向四果などと関連付け構成されており、ここに正量部の修道説の特色の一つが見られる。これは、上上品から下下品までの九品という定型的な形式を採用しないだけに、階位と四向四果の関係についてそれなりの理由を正量部は持っていたものと推測できる。この両者の関係については修行階梯と四果の項目のところで述べる。

### (3) 無学道説

「三界の煩惱を断じることによって無間道 (bar chad med pa'i lam) が生じるのである。ここで、無間道に住する修行者は、三界における貪を離れる者である。

阿羅漢 (dgra bcom pa) は〔無間道に住する者では〕ないのである。無

間道が減する時、最後の果である阿羅漢性を獲得するのである。三界から貪を離れることが阿羅漢である。」 (D. 237a5-7, P. 169b6-7)

修道における三界の煩惱を断滅することで無間道が生起するが、直ちにこの無間道が減して修行階梯の最上位である阿羅漢果が生じる、とされる。これを説一切有部流に言えば、無間道の後に解脱道に入り、そこで阿羅漢性を獲得する、ということである。ここで言う無間道の意味は説一切有部と同じ用法と見做してよいであろう。

この阿羅漢性を獲得したことが無学道であることについて次のように説かれる。

「第十五心が無色〔界〕繫の修所断の煩惱を断じることにより無色界における貪りを離れることをなすことから、第十六心は努力する (btsal bya yin pa) ことによって〔得た〕道である。〔それは〕無学 (mi slob pa) 果の状態 (gnas skabs) であり、通達 (rtogs pa) のすべての区別を得て、阿羅漢性を得る心である。そのことを完全に成就することによって無上正覚となるのである。」 (D. 238b5-6, P. 171b4-6)

即ち、第十六心という修行階梯の最上において生じる智が阿羅漢性を得る心であり、その道が無学の状態であるという。そしてその状態を完全に成就したことを無上正覚というのである。ここでは、無学道という術語としての表現は見られないが、文脈から判断して正量部も修行階梯の最上位を無学道としたと考えることに問題はないであろう。尚、阿羅漢の詳細に関しては後述する。

#### (4) 十六心説

正量部は見道、修道、無学道において煩惱を断じる智（心）が十六種生じると説く。即ち、見道においては欲界、色界、無色界の三界に各々法智、観察智、類智の三智の計十二智（心）が生じ、修道においては欲界に生じる智が第十三心と言い、色界の智が第十四心、無色界の智が第十五心、そして無学道において生じる智が第十六心とされる。このように、正量部は無漏道に入ってから、無学道に至る過程において随眠、非随眠の煩惱を断じるために生起する智

(心)を十六種に区分していることが判る。それに対して、説一切有部は見道において三界各々に法智忍、法智、類智忍、類智の四智(心)が生じ、計十六の智(心)が生起するが、其中最後に生じる道類智は見所断ではあるが見道ではないとされることから、結局見道では苦法智忍より道類智忍までの十五智(心)と修道での一智(心)の十六心説を採る。このような両部派の相違は、一つは見道における智(心)の考え方と、他は修道、無学道にその智(心)が存在するか否かという考え方によるものと言えよう。

### 〔3〕 見道、修道と所断の煩惱

ここでは、見道と修道において如何なる煩惱がどのように断じられるのか、について述べる。先ず見所断の煩惱に関しては、欲界における苦法智は十随眠と二十非随眠を断じ、色界における苦類智は九随眠と十一非随眠を、無色界における苦類智は九随眠と八非随眠を断じる、とされる。欲界における集法智は七随眠と二十非随眠を、色界における集類智は六随眠と十一非随眠を、そして無色界における集類智は六随眠と八非随眠を断じる。滅諦の場合は集諦と同じである。欲界における道法智は八随眠と二十非随眠を、色界における道類智は七随眠と十一非随眠を、無色界における道類智は七随眠と八非随眠を断じる、とされる。

次に修所断の煩惱に関して言えば、欲界では四随眠と二十一非随眠を断じ、色界では三随眠と十一非随眠を、そして無色界では三随眠と八非随眠を断じる、と規定される。<sup>(9)</sup>

以上を纏めると、見苦所断は二十八随眠と三十九非随眠、見集所断と見滅所断は十九随眠と三十九非随眠、見道所断は二十二随眠と三十九非随眠となり、合計見所断は八十八随眠と百五十六非随眠となる。修所断は十随眠と四十非随眠となり、正量部の説く所断の煩惱は随眠が九十八種で、非随眠が百九十六種となる。

この煩惱の法数に関して、『律二十二明了論』に「三界の上心惑に二百九十四あり。」とし、更に「欲界の上心惑に百三十七あり。……色界の上心惑に八

十六あり。……無色界の上心惑に七十一あり。」と説かれている。更に、この真諦の註釈を伝え残している『四分律疏飾宗義記』に「欲界の大小の惑は百三十七有り……色界の大小の惑は八十六、無色界の大小の惑は七十一<sup>(9)</sup>」とある。ここでの大惑とは随眠のことで、小惑とは非随眠のことであろう。この意味は、欲界においては随眠が三十六、非随眠が百一の計百三十七であり、色界においては随眠が三十一、非随眠が五十五の計八十六であり、無色界においては随眠が三十一、非随眠が四十の計七十一であり、随眠と非随眠の合計が二百九十四というSAVの記述と全く同一であるところにある。このSAVの記述は『律二十二明了論』の内容を詳述したものであり、一方『律二十二明了論』の説示によってSAVの記述が検証されたことにもなる。

以上の説示を随眠と非随眠に区分して纏めると次のように表示できるであろう。

〔所断の煩惱—随眠〕

	見 所 断 (88)			修 所 断 (10)		
	欲 界 (32)	色 界 (28)	無色界 (28)	欲界 (4)	色界 (3)	無色界 (3)
	苦集滅道	苦集滅道	苦集滅道			
貪	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇	〇	〇
瞋	〇〇〇〇			〇		
慢	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇	〇	〇
痴	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇	〇	〇
邪 見	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇			
有身見	〇	〇	〇			
辺執見	〇	〇	〇			
見 取	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇			
戒禁取	〇 〇	〇 〇	〇 〇			
疑	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇			



〔所断の煩惱一非随眠〕

	見 所 断 (156)			修 所 断 (40)		
	欲 界 (80)	色 界 (44)	無色界 (32)	欲界 (21)	色界 (11)	無色界 (8)
	苦 集 滅 道	苦 集 滅 道	苦 集 滅 道			
不 信	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○	○	○
無 慚	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○	○	○
誑	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○	○	○
諂	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○	○	○
不 察	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○	○	○
掉 挙	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○	○	○
放 逸	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○	○	○
昏 沈	○○○○○			○		
下 劣	○○○○○			○		
無 愧	○○○○○	○○○○○		○	○	
大 執	○○○○○	○○○○○		○	○	
瞋	○○○○○			○		
睡 眠	○○○○○			○		
嫉	○○○○○			○		
悔	○○○○○			○		
覆	○○○○○	○○○○○		○	○	
僞	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○	○	○
慳	○○○○○			○		
不 忍	○○○○○			○		
恨	○○○○○			○		
食不調性				○		

〔 4 〕 修行階梯と四果

(1) 預流果、一來果と不還果説

本項では修行階梯と預流果など四向四果との関係、並びに十六心と四向四果との関係を中心に考察したい。

先ず、修道の階梯と四向四果との関係から、その所説を眺める。

「そこで、欲〔界〕に属す貪と瞋と慢と無明の相 (mtshan nyid) と二十の非随眠の相の煩惱の纏まった諸蘊を、道の力によって十支に開く支〔の中〕、最初に三を断じると、後生 (srid pa tha ma) が七度となるのである。第四支を獲得する者は家々 (rigs nas rigs) である。第四と第五を断ちつつ、断じる者は家々のみである。第六支を獲得する者は、一來 (lan cig phyir 'ong ba) である。その時、預流果は減するのである。第七支もまたこのものである。後の支の三を断じる者は、一種子 (sa bon gcig pa) である。欲〔界〕に属す結を余すことなく (ma lus pa) 断ずる者が上流 (gong du 'pho ba) であり、欲界における貪を離れる不還である。

色〔界〕に属す貪と慢と無明の随眠相と、不信、無慚、誑、諂、不察、掉挙、放逸、憍、食不調性の非随眠相を一纏めにして、色〔界〕に属する結は、先述の如く十種〔の支に開く〕のである。そこでの支は、最初に三を断じる者が上流なのである。他の二支を断じる者は、有行般〔涅槃〕 ('du byed dang bcas nas yongs su mya ngan las 'da' ba) となるのである。他の二支を断じる者は、無行般〔涅槃〕 ('du byed med par yongs su mya ngan las 'da' ba) である。他のまた二支を断じる者は、生般涅槃 (skyes nas yongs su mya ngan las 'da' ba) となるのである。第十支を獲得する者は、中般涅槃 (bar ma dor yongs su mya ngan las 'da' ba) である。第十支を完全に断じる者は、二界における貪りを離れる不還である。

無色〔界〕もまた貪と慢と無明の随眠相と、不信など七と橋を伴う〔非随眠〕相の結は、先述の如く十種〔の支に開く〕のである。プトガラはまた四〔種〕である。即ち、中般涅槃を除いた者である。そこで、無色〔界〕において貪りを離れば、中般涅槃がない者〔となり〕、或いはない者であって、同様に無色〔界〕において色を離れる故に、〔そして〕行くべき (bgrod bya) 境 (yul) がない故に、中有がない者である。それによって、中般涅槃がない者〔となる〕のである。」

(D. 236b1-237a2, P. 168b5-169a8)

欲界など三界は各々十支に区分され、その基準で四果との関係が説かれる。欲界では第一～第三支までの煩惱を断じることによって預流果となり、第四・五支の煩惱を断じて家々となり、同様に第六・七支は一來果となり、第八～十支は一種子となり、そしてそこで欲界の煩惱をすべて断じると不還果となる。ここで、家々とは一來向のことで、一種子とは別名一間とも言ひ不還向のことを指す。預流向に関しては何も記述されていないが、見道において煩惱を断じることには差し支えないであろう。このような正量部説に対し、説一切有部は三界を各々九品に区分するため当然のこと相違する。即ち、苦法智忍～道類智忍までを預流向、道類智を預流果とし、欲界の上上品～中中品を一來向、中下品を一來果、下上品～下中品を不還向、下下品を不還果という見解であり、兩部派に相違が見られる。

ところで、家々とは一來向のことで、一種子とは別名一間とも言ひ不還向のことを指すとしたが、説一切有部では前者は一來向の中で前三品・四品を断じた聖者をいい、後者は不還向の中で第七・八品を断じたが未だ一・二品の残余がある聖者をいう。いずれも兩向の特定の聖者を指すのであるが、正量部ではあたかもそれを向自体と見做しているようにも思える。正量部説を眺める時、四向の表現は見られないが、

「苦〔諦〕における法智は正智 (yang dag par rdzogs) で、〔そこに〕住する修行者は異生性 (so so skye bo niyd) を減しつつ、それを減してから聖なる因である八〔輩〕の最初となることによって、〔阿羅漢果から数えて第〕八ということが説かれるのである。即ち、預流果〔を得る〕目的で〔その流れに〕入ることなのである。」 (D. 233b4-5, P. 165a7-8)

と規定していることから判断して、当然正量部も四向を説いたものと見做して問題はないであろう。

さて、各果の中の預流果に関しては次のように説かれる。

「ここで、第十三による果の心に住する修行者は、後生の預流が七度である。〔それは〕始終のない輪廻の大海の故に、有 (srid pa) の住処は四七日である、という意味である。ここで、四七日とは、即ち次の如くである。人の極七有生 (srid pa bdun) と、人中 (mi'i bar) の極七有生と、天の

極七有生と、天中 (lha'i bar ma) の極七有生である。ここで、預流果の心において果に含まれる静慮の道 (bsam gtan gyi lam) は無漏を獲得しつつ [も]、その第十三の果の心から反対に、欲 [界] に属する纏が生じる時、それ [が生じる] 故に無漏の静慮の道を獲得することは減するのである。」 (D. 235b4-7, P. 167b5-168a1)

預流果にあっては今後七返の生を経なければ涅槃の果を獲得できないとするのである。この極七有生は人、人中、天、天中の四種に分類されているが、これは人と天を生有と中有との二有に分け、計二十八有としたものと考えられる。

欲界において貪を離れない修行者の心である預流果の階位は纏が生じた時は無漏の静慮の道を得ることができず、修道から退転すると説くのである。

そして、一來果とは欲界における貪りを離れること半ばの修行者の心と規定される。この貪りを離れること半ばとは、所謂薄貪<sup>60</sup>瞋癡のことを指しているであろう。

不還果に関しては、欲界と色界において貪を離れる修行者の心と規定され、それには五種の区別があるとされる。即ち、(1)上流 (2)有行般涅槃 (3)無行般涅槃 (4)生般涅槃 (5)中般涅槃の五種である。その内容について何も説かれていないので詳細は判らないが、煩惱を断じた段階に対応させて説明している。それによれば、欲界において余すことなく煩惱を断じた者、及び色界の最初の三支の煩惱を断じた者を上流といい、色界の次の二支の煩惱を断じた者を有行般涅槃、更に二支を断じた者を無行般涅槃、他の二支を断じた者を生般涅槃、そして最後の第十支を断じた者を中般涅槃という。この段階において欲界と色界の二界の貪りを離れた不還果とする。また、無色界における不還果は、貪りと色がないことによって中有がない者となり、中般涅槃が除かれ、四種となる。即ち、欲界を離れ色界に行く五種の不還果の修行者と無色界に行く四種の不還果の修行者が説かれる。この五種の不還果説を説一切有部説と比較すると、欲界から色界の中有において般涅槃する中般涅槃、色界に生じて間もなく般涅槃する生般涅槃、色界に生じて長い間加行して般涅槃する有行般涅槃、色界に生じて長い間いても加行せず般涅槃する無行般涅槃、そして色界に生じて後更に上天において般涅槃する上流と説明しているだけで、正量部のように十支の如

き段階を区分して説明はされていない。それ故、両部派を厳密には比較することができない。

ここで、四果と十六心、特に第十三心との関係について述べる。

「[道類智] に続いて、第十三は、果の心であり、煩惱を減すること ('joms byed) はないのである。それによって、欲[界]において貪を離れない修行者を、決定して預流果 (rgyun du zhugs pa 'bras bu) の心と規定するのである。その果の心性が世間道 ('jig rten pa'i lam) による欲界における貪りを離れること半ば (phyed pa) [の修行者] を決定して一來果 (lan cig phyir 'ong ba'i 'bras bu) [の] 心と規定するのである。その第十三の心性が、世間道による欲[界]における貪を離れる修行者を決定して不還果 (phyir mi 'ong ba'i 'bras bu) の心と規定するのである。同様に、欲[界]と色[界]において貪を離れる決定をする修行者のその第十三の果の心は、不還果の心と規定されるのである。」

(D. 234b6-235a2, P. 166b5-167a1)

修道における欲界には預流果、一來果、そして不還果の階位が説かれるが、そのいずれもが十六心の中の第十三心とされる。故に、預流向は前十二心に対応し、預流果、一來果、そして不還果が第十三心に、色界繫の修所断の煩惱を断じる智が第十四心、無色界繫の修所断の煩惱を断じる智が第十五心、そして無学道における阿羅漢果が第十六心ということになる。第十四心、第十五心は阿羅漢向に該当するであろうが、ここでは明示されていない。このような四果と十六心の見解は説一切有部説と大きく異なる。

## (2) 阿羅漢果説

阿羅漢の定義は、無学道で既述したように三界の煩惱を断じることによって生じる無間道が減する時に最後の果である阿羅漢性を獲得するものであり、三界から貪を離れたものが阿羅漢である、とされる。

その阿羅漢は六種に区分される。六種の阿羅漢とその規定は次の如くである。

### (1) 退転の有法者 (yongs su nyams pa'i chos can)

「退転の有法者は、果を退転する分を有する者 (skal ba can) である。」

(2)死を思念する有法者 ('chi bar sems pa'i chos can)

「死を思念する有法者は、自害を欲する分を有する者である。」

(3)護持の有法者 (rjes su srung ba'i chos can)

「護持の有法者は、〔阿羅漢〕果を護持する分を有する者である。」

(4)住処が動かない者 (gnas pa mi skyod pa)

「住処を観察する者 (rtog pa) は、住処の分を有する者が退転しないと共に現起しないことで〔も〕ある。」

(5)現起の分を有する者 (mngon du byed pa'i skal ba can)

「現起の分を有する者は、不動が現起する分を有する者である。」

(6)不動の有法者 (mi g'yo ba'i chos can)

「不動〔の有法〕者は、それによって無生智 (mi skye ba'i ye shes) が生じる者である。」

更に、その不動の有法者は三種に分類される。その三種と不動の理由を示すと即ち次の如くである。

①声聞覚「煩惱を無生 (mi skye ba) と智ることが不動であることは、声聞の〔不動〕である。」

②独覚「雑染 (kun nas nyon mongs pa) と疑い (the tshom) を無生と智ることが不動であることは、独覚の〔不動〕である。」

③無上正覚仏「雑染〔と〕疑いを無生と智ることがその不動であることは、世尊仏〔の不動〕である。」

この正量部の六種阿羅漢説に対し、説一切有部のそれはどのように説かれているのかをここで眺める。『俱舍論』<sup>13</sup>には、次のように六種阿羅漢が説かれる。

(1)退法「小縁に遇えば、便ち所得を退するもの」

(2)思法「退失を懼れて恒に自害せんことを思うもの」

(3)護法「所得に於いて喜びて自ら防護するもの」

(4)安住法「勝れたる退縁を離れては自ら防がずと雖も、亦た能く退せず。勝れたる加行を離れては亦た増進せざるもの」

(5)堪達法「彼の性は堪能にして、好んで練根を修して速に不動に達するもの」

(6)不動法「彼れ必ず退すること無きもの」

両者を比較すると、六種の阿羅漢とも同じであり、その内容も不動法を除きほぼ一致したものとなっている。

正量部説は不動の有法者である阿羅漢を無生智が生じた者としてそれを三種に区分し、声聞覚と独覚と無上正覚仏の中、前者を煩惱の無生智が生じた者とし、後者二つを雑染と疑いの無生智が生じた者と規定する。SAVには独覚と無上正覚仏に全く同じ規定がなされているが、それを両者が同一の境地との見解と見るべきか、記述に誤りがあるのかは今判断はできない。

次に、阿羅漢の退転、不退転について正量部はどのように考えたのかを眺めてみたい。

「それら〔六種の阿羅漢〕の中、退転する有法者は、果を退転する者であるけれども他の〔五種の〕阿羅漢は〔退転し〕ないのである。それは、また通達 (rtogs pa) の区別からであって、等至 (snyoms bar 'jug pa) の区別からということ説けば、そのことから〔その他の阿羅漢も〕退転するのである。〔しかし〕正覚仏は、それからも退転しないのであり、〔それは〕遍く失念のない (kun nas bsnyel ba med pa) 有法者であるが故である。」  
(D. 237b4-5, P. 170a6-8)

ここには、二つの立場から阿羅漢の退転、不退転が説かれている。即ち、通達の区別からは退転する有法者（退法）だけが退転し、他は不退転である、とする。等至の区別から見れば六種の阿羅漢すべてが退転するが、唯一不動の有法者（不動法）の中の無上正覚仏だけが不退転とされる。このような見解は、説一切有部の性と果からの退、不退説とも相違し、正量部固有の説のようである。

## 〔5〕 その他一五現観説

正量部の聖諦現観説については未だ知られることのなかった説である。SAVに詳述されているので、ここで紹介してみたい。まず、現観の意味を次のように規定する。

「現観 (mngon par rtogs pa) の意味は何であるのか、と言えば〔それ

について〕説こう。世第一法（'jig rten pa'i chos mchog）と、第十三の果の心と、十二の智（shes pa）と、聖諦の所知（shes bya）を修行者が現前に観察することである。」（D. 235a4-5, P. 167a4-5）

即ち、四善根位の最高の法である世第一法と、見道における十二の智と、第十三果の心である修道における欲界の智を主として現観智と規定しているが、ここで有漏道である世第一法をも現観智としている点は見道に入り無漏智によって四諦の理を観察するという説と異なり、正量部固有の説であると言えるであろう。

この現観は次のような五種に分類される。

- (1) 見 (mthong ba) の現観 (2) 断 (spangs pa) の現観 (3) 証 (mngon du byed pa) の現観 (4) 遍知 (yongs su shes pa) の現観 (5) 修習 (sgom pa) の現観

これら五種の現観は、更に見の現観が四種に、断の現観が四種に、証の現観が二種に、遍知の現観が九種に、そして修習の現観が四種に分類されている。

これらを表示して纏めると次のようになる。

- (1) 見の現観
  - (1)所縁 (dmigs) を能取する見
  - (2)現前を能取する見
  - (3)義 (don) の観察の見
  - (4)相 (mtshan nyid) の見
- (2) 断の現観
  - (1) (?) (rnam par rengs pa) の断
  - (2)欲貪の断
  - (3)減 ('grib pa) の断
  - (4)減 ('gog pa) の断
- (3) 証の現観
  - (1)身証 (lus kyi mngon du byed pa) を獲得すること
  - (2)智慧による簡択 (so sor rtogs pa)
- (1)集〔諦〕における法智の遍知
  - (2)集〔諦〕における類智の遍知
  - (3)滅〔諦〕における法智の遍知
  - (4)滅〔諦〕における類智の遍知



- (4) 遍知の現観
  - (5)道〔諦〕における法智の遍知
  - (6)道〔諦〕における類智の遍知
  - (7)修道における欲〔界〕の食りを離れることの遍知
  - (8)修道における色〔界〕の食りを離れることの遍知
  - (9)修道における無色〔界〕の食りを離れることの遍知
- (5) 修習の現観
  - (1)生 (skye ba) の修習
  - (2)修 (kun tu brten pa) の修習
  - (3)守 (sbas pa) の修習
  - (4)遠離 (rnam par ldog pa) の修習

このような五種に分類する正量部の現観説を、説一切有部の現観説と比較すると興味深い異同があることが判る。説一切有部の現観説は、所謂見現観と縁現観と事現観の三現観説<sup>09</sup>であり、この中、事現観の事は〔苦の〕遍知と〔集の〕永断と〔滅の〕作証と〔道の〕修習の四種に分類されている。三現観説それぞれ自体は正量部と大きく異なるものであるが、しかし事現観の四種の事業とその項目を比較する時、それが正量部の五現観の項目と殆ど一致していることが判明する。四種の事業の詳細な内容は判らないため十分な比較はできないが、少なくとも字句からは一致点を見出せる。即ち、説一切有部の三現観の中、縁現観を除いた見現観と事現観を四種に開いた計五種の現観が正量部の五現観に対応していることになる。ただ、判る範囲でその内容を比較すると、見現観は『俱舍論』に「無漏の慧が諸の諦境に於いて現見すること分明なる」と規定されるに過ぎず、細部にわたる比較は無理であり、また証に関しても見証と得証の二種が説かれるが、一致しているとも思えない。いずれにしても、正量部の五現観説は少なくとも字句の上からは説一切有部の三現観説とは異なるものの、それを組み換え直した如き説と解釈できるかも知れない。

チベット語訳 SAV 第21章「聖諦決択」(2)

——見道，修道，無學道——

デルゲ版 (D) 233b2~240a7

北京版 (P) 165a4~173b6

その〔世第一法〕から上方において何が生起するのか、と言えは〔それについて〕説こう。即ち、その世第一法から連続して修行者が諸諦に随入することから、欲界に属す苦〔諦〕において無漏の法智 (chos shes pa) が生じるのである。そこで、法とは法性のみのことで、それから生じつつ、心から〔生じ〕ないことによって、それ故に法智が生じるのである。法ということが苦諦のことで、それが最初に知られるのが法智で、或いは法は即ち四聖諦のこと〔をいうの〕である。それらは先ず欲界は無常であるということが無漏の智であり、その〔智〕が法智である。苦〔諦〕における法智は正智 (yang dag par rdzogs) で、〔そこに〕住する修行者は異生性 (so so skye bo nyid) を滅しつつ、それを滅してから聖なる因である八〔輩〕の最初となることによって、〔阿羅漢果から数えて第〕八ということが説かれるのである。即ち、預流果〔を得る〕目的で〔その流れに〕入ることなのである。

苦〔諦〕における法智が完全に成就する (yang dag par thob pa) 時、輪廻の因 (rgyu) である欲界繫 ('dod pa na spyod pa) の苦〔諦〕に属する (P. 165b) 十の随眠の煩惱を断つ (spong ba) のである。即ち次の如くである。貪、瞋、慢、無明、邪見、有身見 ('jig tshogs la lta ba)、辺執見、見取、戒禁取、疑である。非随眠は二十がすべてとなる。即ち次の如くである。不信、無慚、誑、諂、不察、掉挙、放逸、憍、無愧、大執、覆、昏沈、下劣、懈怠<sup>(4)</sup> (le lo)、(D. 234a) 睡眠、嫉、悔、慳、不忍、恨であり、その〔法智〕はこれらの煩惱を断つのである。

苦〔諦〕におけるその法智に続いて、類智 (rjes su shes pa) が生じる目的から苦〔諦〕に觀察智 (rtogs pa'i shes pa) が生じるのである。どのようにしてかと言えは、それら〔法智と類智が生じるの〕と同様に、それによって推し

て知るべきである (de dag bzhin du 'dis de bzhin du lhag ma'o), ということがなければ<sup>(2)</sup>智が生じることはないのである。それによって類智が成就する目的から観察智 (so sor rtog pa'i shes pa) が生じるのである。それは、また断じるものを見ることで煩惱を能解すること ('jig byed) はないのである。

観察智に連続して苦〔諦〕に類智が生じるのである。それが生じる時、随眠性の瞋を除く色〔界〕に属する九つと、非随眠の十一を断つのである。即ち次の如くである。不信、無慚、誑、諂、不察、掉挙、放逸、憍、無愧、大執、覆である。その〔随眠〕とこの〔非随眠と〕で〔断たれる〕煩惱は二十となるのである。無色〔界〕に属するものは、随眠が九で、非随眠が八である。即ち次の如くである。不信 (P. 166a) などそのものである。その〔随眠〕と〔非随眠と〕で十七の煩惱を断つのである。

そのように、苦〔諦〕においてこの〔法智、観察智、類智の〕三つの智がすべて生じるのである。それによって、三界〔各々三十、二十、十七の計〕六十七の煩惱を断つのである。他の三諦において〔も同様に〕各々智は三つづつ生じるのである。

それに従って、集〔諦〕における法智が成就する時、有身〔見〕 (lus la dam pa), 辺執〔見〕, 戒禁取を除く欲〔界〕に属す七つの随眠と、非随眠が不信など二十で、それら二十七の煩惱を断つのである。それに従って、集〔諦〕における類智が生じる時、有身〔見〕, 辺執〔見〕, 戒禁取、瞋を除く六つの随眠と、十一の非随眠が〔煩惱の〕すべてである。即ち次の如くである。不信、無慚、誑、諂、不察、掉挙、放逸、(D. 234b) 憍、無愧、大執、覆である。無色〔界〕に属すものは、随眠が六つと、非随眠が八である。即ち次の如くである。不信、無慚、誑、諂、不察、掉挙、放逸、憍であり、それら十四<sup>(4)</sup>の煩惱を断つのである。集〔諦〕のすべての智において〔三界で各々二十七、十七、十四の計〕五十八の煩惱〔を断つ〕のである。

それに従って、滅〔諦〕の智において〔も〕五十八〔の煩惱を断つもの〕となるのである。

それに従って、道〔諦〕における法智が成就する時、そこにおいて有身、辺執見を除く欲〔界〕に属する八つの随眠と、非随眠が二十であり、〔計〕二十

八の煩惱を断つのである。それに従って、道〔諦〕における類智が生じる時、(P. 166b) そこに有身〔見〕、辺執見、瞋を除く色〔界〕に属す七つの随眠と、十一の非随眠が〔所断の煩惱〕である。その〔随眠〕とこの〔非随眠〕で無色〔界〕に属するものは、七つの随眠と、非随眠が不信などから放逸までの八つ<sup>(6)</sup>である。即ち次の如くである。道〔諦〕の智において六十一の煩惱を断つのである。

以上から、〔智は〕苦〔諦〕における法智に始まり、枚挙すると道〔諦〕における類智〔までの〕十二である。〔即ち、〕苦〔諦〕における法智と、苦〔諦〕における観察智と、苦〔諦〕における類智、そして集〔諦〕における法智と、集〔諦〕における観察智と、集〔諦〕における類智、そして滅〔諦〕における法智と、滅〔諦〕における観察智と、滅〔諦〕における類智、そして道〔諦〕における法智と、道〔諦〕における観察智と、道〔諦〕における類智である。

それに続いて、第十三は、果の心であり、煩惱を減すること ('joms byed) はないのである。それによって、欲〔界〕において貪を離れない修行者を、決定して預流果 (rgyun du zhugs pa 'bras bu) の心と規定するのである。その果の心性が世間道 ('jig rten pa'i lam) による欲 (D. 235a) 界における貪りを離れること半ば<sup>(7)</sup> (phyed pa) 〔の修行者〕を決定して一來果 (lan cig phyir 'ong ba'i 'bras bu) 〔の〕心と規定するのである。その第十三の心性が、世間道による欲〔界〕における貪を離れる修行者を決定して不還果 (phyir mi' ong ba'i 'bras bu) の心と規定するのである。同様に、欲〔界〕と色〔界〕において貪を離れる決定をする修行者のその (P. 167a) 第十三の果の心は、不還果の心と規定されるのである。

また〔説かれる。〕

『その〔世第一法〕に連続して、苦〔諦〕における無漏の法智は、そこに住する異生の地界 (sa mtshams) を渡すのであり、〔そして〕第八となるのである。聖者の果〔を得る〕目的で預流である。法智、観察智という〔智〕から〔類〕智が随生する。同様に、因 (rgyu) と寂静 (zhi ba) 〔と〕方便 (thabs) 〔の〕三〔諦〕において三智 (blo) が次第によって

〔生じるの〕である。それに続いて、第十三〔心の〕智などは過失 (sky-on) を断じないのである。その心は果が三つとなり、〔即ち〕貪りを伴うもの、〔貪りの〕半ばを伴うもの、〔そして〕貪りを離れたものである。』と説かれている。

現観 (mngon par rtogs pa) の意味は何であるのか、たとえば〔それについて〕説こう。世第一法 (<sup>9)</sup> 'jig rten pa'i chos mchog) と、第十三の果の心と、十二の智 (shes pa) と、聖諦の所知 (shes bya) を修行者が現前に観察することである。

また〔説かれる。〕

『ここで、その如く現観は智<sup>10</sup>〔と〕所知を平等に観察すること〔である〕。』

と説かれている。

その現観は、また五種である。即ち、見 (mthong ba) の現観と、断 (spangs pa) の現観と、証 (mngon du byed pa) の現観と、遍知 (yongs su shes pa) の現観と、修習 (sgom pa) の現観である。

また〔説かれる。〕

『その〔現観〕は五種と認める。〔即ち〕見と、断 (spong ba) と、証と、遍知と、修習である』

と説かれている。

そこで、見とは四種である。即ち次の如くである。所縁 (dmigs) を能取する見と、現前を能取する見と、義 (don) の観察の見と、相 (mtshan nyid) の見である。

断は四種である。即ち次の如くである。(?) (rnam par rengs pa) の断と、欲<sup>11</sup> (D.235b) 貪の断と、減 ('grib pa) (P.167b) の断と、滅 ('gog pa) の断である。

証は二種である。即ち次の如くである。身証 (lus kyi mngon du byed pa) を獲得することと、智慧による簡択 (so sor rtogs pa) である。

遍とは、すべてである。真実を知りつつ、有漏を離れることが知であり、〔それは〕九種である。即ち次の如くである。集〔諦〕における法智の遍知

と、集〔諦〕における類智の遍知と、滅〔諦〕における法智の遍知と、滅〔諦〕における類智の遍知と、道〔諦〕における法智の遍知と、道〔諦〕における類智の遍知と、修道における欲〔界〕の貪りを離れることの遍知と、修道における色〔界〕の貪りを離れることの遍知と、修道における無色〔界〕の貪りを離れることの遍知である。

その修習は四〔種〕の修習である。即ち次の如くである。生 (skye ba) の修習と、修 (kun tu brten pa) の修習と、守 (sbas pa) の修習と、遠離 (rnam par ldog pa) の修習である。

ここで、第十三による果の心に住する修行者は、後生の預流が七度である。〔それは〕始終のない輪廻の大海の故に、有 (srid pa) の住処は四七日である、という意味である。ここで、四七日とは、即ち次の如くである。人の極七有生 (srid pa bdun) と、人中 (mi'i bar) の極七有生と、天の極七有生と、天中 (lha'i bar ma) の極七有生である。

ここで、預流果の心において果に含まれる静慮の道 (bsam gtan gyi lam) は無漏を獲得しつつ〔も〕、その第十三の果の心から反対に、欲〔界〕に属する纏が (P. 168a) 生じる時、それ〔が生じる〕故に無漏の静慮の道を獲得することは滅するのである。

また〔訪かれる。〕

『静慮の道の果を獲得することを失することは、ここにまた幾分かあるのである。そこに、依止する (brten pa) 果を獲得する煩惱が生じるのである。』

と説かれている。

それによって、道が二種説かれることになるのである。即ち次の如くである。(D. 236a) 有漏と無漏である。その中、有漏は四〔種〕である。即ち次の如くである。忍を思択することと、名の想と、相の想と、世第一法である。無漏の道は二〔種〕で、〔即ち〕見道 (mthong ba'i lam) と修道 (bsgom pa'i lam) である。その中、見道は苦諦などの十二の智が〔既に〕説かれたのである。

〔ここでは〕修道が説かれるべきである。もし、〔見道に〕従って修行者が

〔四〕諦を見ることを獲得することによって、そのように見所断 (spang bar bya ba) の随眠など輪廻の因を伴うものである欲貪 ('dun pa chags pa) を断じることと、遍知〔によって〕断じることなどの根本がないことによって〔存在する〕ならば、〔そこで〕何をなすのか、たとえば〔それについて〕説こう。有 (srid) において輪廻が回る ('jug pa) ことが、有において苦が回る事なのである、と知られるべきなのである。即ち、〔修道は〕修所断〔の煩惱〕が輪廻の因であることによって随眠など〔輪廻〕の因を伴うものを断じる故に、〔そして〕見の真実性 (de kho na nyid) を幾度となく勤 (rtsol ba) の相によって修道を行なう (goms pa) 意味から成り立つ (rtsom pa) ののである。

その修道は二種である。即ち次の如くである。覺支 (byang chub kyi yan lag) から生じるものと、覺支から生じないものである。その中、修道が (P. 168b) 四聖諦の他の中のいずれか一つの所縁を能取することと、現前において決定することの成り立ちによって生じることが、〔覺〕支をもつものである。修道が麤 (rags pa) と寂靜 (zhi ba) なる相 (rnam pa) などによる所縁〔即ち〕修道がそれら〔両者〕の相〔を能取すること〕、或いは清淨によって現前において決定することが、覺支をもつものではないのである。

そこで、すべてが劣なる道による時、三心が和合すること (nye bar bsags pa) により結 (kun tu sbyor ba) を断つのである。即ち次の如くである。劣なる<sup>09</sup>修道は生じる支 (cha) と、〔その〕住の支と、〔その〕滅の支が結び付いて結を断つのである。明勝な (gsal ba) 修道は生じる支によって<sup>07</sup>欲〔界〕に属する修道の断じられるべき結をすべて断つのである。同様に、色〔界〕に属する結をすべて断つのである。(D. 236b) 同様に、無色〔界〕に属する結をすべて断つのである。一時に、二界或いは三界の結を断つことはないのである。

そこで、欲<sup>09</sup>〔界〕に属す貪と瞋と慢と無明の相 (mtshan nyid) と二十の非随眠の相の煩惱の纏まった諸蘊を、道の力によって十支に開く支〔の中〕、最初に三を断じると、後生 (srid pa tha ma) が七度となるのである。第四支を獲得する者は家々 (rigs nas rigs) である。第四と第五を断ちつつ、断じる者

は家々のみである。第六支を獲得する者は、一來 (lan cig phyir 'ong ba) である。その時、預流果は減するのである。第七支もまたことものである。後の支の三を断じる者は、一種子 (sa bon gcid pa) である。欲〔界〕に属す結を余すことなく (ma lus pa) 断ずる (P. 169a) 者が上流 (gong du 'pho ba) であり、欲界における貪を離れる不還である。

色〔界〕に属する貪と慢と無明の随眠相と、不信、無慚、誑、諂、不察、掉挙、放逸、憍、食不調性の非随眠相を一纏めにして、色〔界〕に属する結は、先述の如く十種〔の支に開く〕のである。そこで支は、最初に三を断じる者が上流なのである。他の二支を断じる者は、有行般〔涅槃〕 ('du byed dang bcas nas yongs su mya ngan las 'da' ba) となるのである。他の二支を断じる者は、無行般〔涅槃〕 ('du byed med par yongs su mya ngan las 'da' ba) である。他のまた二支を断じる者は、生般涅槃 (skyes nas yongs su mya ngan las 'da' ba) となるのである。第十支を獲得する者は、中般涅槃 (bar ma dor yongs su mya ngan las 'da' ba) である。第十支を完全に断じる者は、二界における貪りを離れる不還である。

無色〔界〕もまた貪と慢と無明の随眠相と、不信など七と憍を伴う〔非随眠〕相の結は、先述の如く十種〔の支に開く〕のである。プトガラはまた四〔種〕である。(D. 237a) 即ち、中般涅槃を除いた者である。そこで、無色〔界〕において貪りを離れば、中般涅槃がない者〔となり〕、或いはない者であって、同様に無色〔界〕において色を離れる故に、〔そして〕行くべき (bgrod bya) 境 (yul) がない故に、中有がない者である。それによって、中般涅槃がない者〔となる〕のである。

また〔説かれる。〕 (P. 169b)

『色〔界〕の貪りを完全に離れる故に、無色〔界〕において中有がない。

〔欲界や色界〕に存在しないことによって〔中般〕涅槃のない有がここにある。』

と説かれている。

断じるプトガラの規定は、色界の如くである。後の三支が生般涅槃であるということが、〔両者の〕区別 (khyad pa) である。



ここで、修道は何であるのか、と言えは〔それについて〕説こう。そこで、欲〔界〕に属す諸法を遍知すること (yongs su shes pa), その支が無漏なること, 〔そして〕無常などの相によって作意する (yid la byed pa) 時, 欲〔界〕に属す修所断の煩惱を断つことである。色〔界〕に属す諸法を遍知すること, その支が無漏で, 〔そして〕無常などの相によって作意することにより, 欲〔界〕と色〔界〕に属す修所断の煩惱を断つのである。無色〔界〕に属す諸法を遍知しつつ, 同様に想うことにより, 修所断の三界の煩惱を断つのである。

三界の煩惱を断じることによって無間道 (bar chad med pa'i lam) が生じるのである。ここで、無間道に住する修行者は、三界における貪を離れる者である。

阿羅漢 (dgra bcom pa) は〔無間道に住する者では〕ないのである。無間道が滅する時、最後の果である阿羅漢性を獲得するのである。三界から貪を離れることが阿羅漢である。その阿羅漢は、また六種である。即ち次の如くである。退転の有法者 (yongs su nyams pa'i chos can) と、死を思念する有法者 ('chi bar sems pa'i chos can) と、護持の有法者 (rjes su srung ba'i chos can) と、住処が動かない者 (gnas pa mi skyod pa) と、(P.170a) 現起 (D.237b) の分を有する者 (mngon du byed pa'i skal ba can) と、不動の有法者 (mi g'yo ba'i chos can) である。ここで、退転の有法者は、果を退転する分を有する者 (skal ba can) である。死を思念する有法者は、自害を欲する分を有する者である。護持の有法者は、〔阿羅漢〕果を護持する分を有する者である。住処を観察する者 (rtog pa) は、住処の分を有する者が退転しないと共に現起しないことで〔も〕ある。現起の分を有する者は、不動が現起する分を有する者である。不動〔の有法〕者は、それによって無生の智 (mi skye ba'i ye shes) が生じる者である。その不動の有法者は三種である。即ち次の如くである。声聞覚と、独覚と、無上正覚仏である。もし、不動がどのようなのか、と言うならば〔それについて〕説こう。煩惱を無生 (mi skye ba) と智ることが不動であることは、声聞の〔不動〕である。雑染 (kun nas nyon mongs pa) と疑い (the tshom) を無生と智ることが不動であることは、

独覚の〔不動〕である。雑染〔と〕疑いを無生と智ることがその不動であることは、世尊仏〔の不動〕である。それらの中、退転する有法者は、果を退転する者であるけれども他の〔五種の〕阿羅漢は〔退転し〕ないのである。それはまた通達 (rtogs pa) の区別からであって、等至 (snyoms bar 'jug pa) の区別からということを説けば、そのことから〔その他の阿羅漢も〕退転するのである。〔しかし〕正覚仏は、それからも退転しないのであり、〔それは〕遍く失念のない (kun nas bsnyel ba med pa) 有法者であるが故である。

もし、聖教 (lung) から四果を説くのであれば、〔それは〕即ち次の如くである。預流果と、(P. 170b) 一來果と、不還果と、阿羅漢果である。ここで、果に関して数多くの解釈 (bshad pa) に相違 ('gal ba) があるというならば、〔それについて〕説こう。相違はないのであり、他の者は、四果の区別を認めることによって、果が〔これ以上〕多くにならない〔ために、この〕区別が生じたものと言うのである。その時、そのような果は、その区別が何であるのかと言えば、〔それについて説こう。〕預流〔と〕の区別は家々である。一種子は一來〔と〕の〔区別〕である。色界における (D. 238a) 不還の五〔種〕の区別は、次の如くである。即ち、上流と、有行般涅槃と、無行般涅槃と、生般涅槃と、中般涅槃である。無色界においては中般涅槃を除いて、四つということで、区別は九〔種〕である。阿羅漢が六種であることは、先述の如くである。それによって、見所断の煩惱を断じた仏と独覚には区別はないのである。そ〔の区別〕は、この有 (srid) における聖道の現觀の次第なのである。

外道 (phyi rol gyi lam) の修行者は欲〔界〕において行じて修所断の煩惱を一分断じ、見所断の煩惱を断じることから、〔その〕第十三は果の心において一來である。このところには、預流果の後に〔続いて〕入ること、家々 (rigs nas rigs su skye ba) の流れに入ることなどはないのである。同様に、欲界の修 (P. 171a) 所断の〔煩惱〕を残らず断じて、その如くに見所断の煩惱を断じることから、第十三の〔果の〕心は不還となるのである。このところには、一來と一種子はないのである。同様に、欲界と色界の修所断の煩惱を断じることから、二界における貪りを離れ、その如くに見所断の煩惱を断じることから、第十三の〔果の〕心において不還となるのである。このところには、色界の五

つのすべての不還はないのである。欲界においては中般涅槃を除いて、すべては四つの不還である。それにより、外道による二界の修所断の煩惱を断じるので色ある。無〔界〕繫 (gzugs med pa na spyod pa) の修所断の煩惱を断じることができることはないのである。法 (D.238b) がかくの如くであることによってである。聖道 ('phags pa'i lam) によっては、三界すべてを断じることであるという規定は正理 (lugs bzang po) である。これは、正に声聞の修道によって煩惱を断じる道理 (tshul) である。独覺乗 (rang sangs rgyas kyi theg pa) は、また外道による欲〔界〕と色〔界〕において行じて修所断の煩惱〔を断じること〕から、それに従って見所断の煩惱を断じて、聖道による無色〔界〕繫を断じて、独覺の菩提を現起する (mngon du byed) ののである。大諸菩薩 (byang chub sems dpa' chen po rnams) は、三万劫 (P.171b) において六波羅蜜を行ずることによって福と智の資糧 (ye shes kyi tshogs) を積んでから兜率〔天〕などに住し、妙なる菩提 (byang chub snying po) に入り、天魔 (lha'i bu'i bdud) を克服してから、順、逆の縁起を完全に観察して忍の行などを成就し、三界の見所断の煩惱を断じることから、第十三心が欲〔界〕繫の修所断の煩惱を断じることにより、欲〔界〕の食を離れるのである。

第十四〔心〕が色〔界〕繫の修所断の煩惱を断じることにより、色〔界〕の食を離れるのである。

第十五心が無色〔界〕繫の修所断の煩惱を断じることにより無色界における食を離れることをなすことから、第十六心は努力する (btsal bya yin pa) ことによって〔得た〕道である。〔それは〕無学 (mi slob pa) 果の状態 (gnas skabs) であり、通達のすべての区別を得て、阿羅漢性を得る心である。そのことを完全に成就することによって無上正覺となるということである。

現観智 (mngon par rtogs pa'i shes pa) が第十二と第十三などの四つの心とで〔計〕十六〔心〕によって仏性 (sangs rgyas nyid) に安住するということである。

また〔説かれる。〕

『如来の三昧は、金剛喩〔定〕の心の分によってすべての漏を断じる力

〔をもつもの〕であるが、非有 (mi srid pa) の故に、それはそれによってではないのである。』(D. 239a)

と説かれている。

この意味は、金剛喻定 (rdo rje lta bu'i ting nge 'dzin) と相応するものが如来 (P. 172a) 〔ということ〕である。心の分によってということは、金剛喻定と相応する心の生起の部分によって〔ということ〕である。すべての漏 (zag pa) ということは、煩惱〔ということ〕である。力ということは、利行 (don byed pa) 〔ということ〕である。それはそれによってではないということとは、その如くであるといえども断じないという意味である。何の故にかと言えば、非有の故にであるということである。それでは、非有の意味は何であるのか、と言えは〔それについて〕説こう。即ち、他と異ならない修習の故に、一つによって断<sup>63</sup>じることのない二界の非同類 (skal mi mnyam) でないその故に、仏は十六刹那性ということである。この意味は、他によって断じることはない〔ということ〕である。その故に、世尊による力〔で〕も他の相続 (rgyud) による煩惱を滅除する (sel ba) ことはないのである。それでは、心の一部分によって自己の相続を滅除するのか、と言えは〔それについて〕説こう。即ち、修習であるが故に、一つによって二界の断はないのである。それ故に、修習であっても一心によって二界の修所断を断じることが非有〔ということ〕である。同様に、修道によって非同類であり、見所断の煩惱を断じることが非有〔ということ〕である。その故にということが、非有の故にということである。仏性は、十六刹那〔によって得られるもの〕であり、第十三〔心で〕はないのであるという意味である。

それでは、見所断も外道が断じることなのか、と言えは〔それについて〕説こう。即ち、聖者 ('phags pa) は、二道とも、欲〔界〕に属し色〔界〕に属す修所断を断じるのである。聖者でない者であるが、外道は欲〔界〕に属す修所断と、色〔界〕に属す修所断を (P. 172b) 断じるのである。無色〔界〕に属するもの〔を断じること〕はないのであり、それは聖道性によって断じられるものであるが故である。

それでは、外〔道〕と聖道〔の〕相の区別は何であるのか、と言えは〔それ

について] 説こう。即ち、寂靜 (zhi ba) と麤 (rags pa) の相が外道である。その如く、欲界は麤である、(D. 239b) ということが麤の相である。色界は寂靜である、ということが寂靜の相である、ということなどであり、外道には多くの相 (rnam pa mang) がある。聖者は四相である。即ち次の如くである。無常の相と、因性の相と、常の相と、出離 (nges par 'byin pa) の相である。このことは、ほんの少し前に詳細に説かれたのである。

また〔説かれる。〕

『淨信 (dad), 精勤 (brtson), 念 (dran pa), 智慧 (shes rab) と定 (ting 'dzin) などは先に〔説き〕導いたのである。道は漏を断じるそのことによって空 (stong pa) の対治なるもの (phyir rgol ba) 〔である。〕』と説かれているこの道が聖道である。そのことによってということは、聖道によって〔ということ〕である。空ということは、充足していないこと (ma ts-hang ba) である。対治なるものということは、外道の解脱によって現出する mānava (nga rgya ba) 〔と〕 íśvara (dbang phyug) など、そして vyāsa (byā sa) と vaśiṣṭha (ba shi sta) 仙人などのものである。

このように、また〔外〕道が二相によっても欲界における貪りを離れることは、すべての色界に生じることであり、〔ただし〕大梵天 (tshangs pa chen po) と無想有情 ('du shes med pa'i sems can) は除くのである。聖者は不還性を〔有し〕色界における貪りを離れることを獲得する時、無色界に生じるのである。それでは、無色界におけると貪りを離れるこの聖者は、どのようにして〔無色界を出離する〕のか、と言えは〔それについて〕説こう。即ち、もしよく燃える鉄の (P. 173a) 丸が非常に太くて大きな薪に入れられる時、それらの薪は残らず燃えて灰となるのであるが、薪の熱性は次第に冷たくなるのである。その如くに、聖なる声聞が鉄丸のことであるが、苦〔諦〕における法智などの道の火がよく燃える中、煩惱の太くて大きな束 (phung po) である見〔所断と〕修所断〔の煩惱〕を〔火の中に〕入れる時、それらが残らず最後まで燃えた後、煩惱の薪は寂靜〔となるの〕であるが、〔しかし、まだ鉄丸が〕残り火のある涅槃 (kun tu 'bar ba nyid phung po lhag ma dang bcas pa'i mya ngan las 'das pa) の界に住するのは、無学道の火が有余であることによってであ

る。次第に、業の異熟を残らず享受 (nye bar longs spyod) してから、自己の身体を捨て、残り火の (D. 240a) なくなった涅槃 (phung po lhag ma med pa'i mya ngan las 'da' ba) に赴くことによって〔鉄丸は〕冷たくなるのである。

〔また、説かれる。〕

『よく燃える鉄丸の如く、煩惱〔である〕薪がよく燃えることによって、阿羅漢は有余〔涅槃〕に住するのであり、〔そして〕次第に冷たくなるのである。その時、集まりのないことの、またその前も滅するものとなり、他の苦は生じないのである。〔即ち〕諸因が滅尽している故である。』と説かれている。

もし、そのように無余の涅槃の界を獲得する時、天、或いは人、或いはその他ということ、どのように言説されるのか、と言えは〔それについて〕説こう。即ち、無余の涅槃は苦の諸因が寂靜することによって、取することがない (nye bar len pa med pa) 故に、六趣に住することはないのである。趣 ('gro ba) がないことによってすべての言説 (tha snyad) は滅する (ldog pa) ののである。天と人ということなど (P. 173b) の言説の依るところが趣である。その故に、すべての趣がないことによって、これか、或いは他のものということの言説は、この解脱の故に滅するのである。例えば、火の燃焼などのすべての言説の依るところが薪である。そのように、取 (nye bar len pa) と共なるプトガラには言説がすべてである。〔そこでは〕取することがないことはないのである。

また〔説かれる。〕

『言説は残らずその依るところが趣なるもの ('gro dngos) である。趣がない故に、〔すべての言説は〕滅するのである。薪を滅尽した火の如くである。』

と説かれている。

このように、またそのこととこれが同一か、或いは異性〔かという〕ことによって説かれるべきものではないのである。非有情 (sems can ma yin), 非有情に非ずもの (sems can ma yin pa ma yin) すべての点からいって

数 (grangs) を超越しているのである。涅槃においてすべて言説がないのは何であるのか、と言えは〔それについて〕説こう。即ち、〔そこでは〕言説があっても、しかし取る言説によって言説されるべきことはないのである。取することがない言説によって言説されるべきである。取することがない言説は三〔種〕である。即ち、それは

また〔説かれる。〕

『解脱 (grol ba) 〔と〕 寂靜 (zhi ba) 〔と〕 不死 (bdud rtsi) に関するもの (son), 〔そして〕 過失 (skyon) のない般涅槃 (yongs su mya ngan 'das), 〔そして〕 仏 〔と〕 善逝 (bde gshegs) 〔と〕 救済者 (skyob pa) など, 〔これらは〕 その時に説く以外のものではないのである。』

と〔説かれている。〕

# 訳註

- (1) D. P. 共に le lo とあるが、この語は第16章では snyoms las と訳されている。両者とも意味は類似しているが、前者は kauśīdya (懈怠), 後者は tandrī (瞋憤) と本来異なった語である。ここでは訳語の混乱としてテキスト通りに訳すが、筆者はこの語を第16章の用例に従って理解しておく。
- (2) D. には shes pa が欠けており、ここはP. に従う。
- (3) D. tshul khrims, P. khrims とあり、ここはD. に従う。
- (4) D. には de が欠けており、ここはP. に従う。
- (5) D. P. 共に「非睡眠が不信などから放逸まで八つ」とあるが、不信から放逸までは七つであり、八つであるならば不信から憍までとなるべきである。
- (6) D. khis, P. gyi で、ここはD. に従う。
- (7) D. byed pa, P. phyed pa で、ここはP. に従う。
- (8) D. 'gs pa, P. 'phags pa で、D. は誤り。
- (9) D. には chos が欠けており、ここはP. に従う。
- (10) D. shes bya mnyam rtogs nyid, P. shes pa shes bya mnyam rtogs nyid とあるが、ここは7音節の偈文であるのでP. に従う。
- (11) D. P. 共に bdun pa とあるが、ここは 'dun pa と読むべきである。
- (12) D. には 'di lta ste が欠けており、ここはP. に従う。
- (13) D. bral pa, P. bral pa'i で、ここはP. に従う。
- (14) D. spyad pa, P. dpyad pa で、ここはP. に従う。
- (15) D. zhen pa, P. zhan pa で、ここはP. に従う。
- (16) D. bsams pa, P. bsags pa で、ここはP. に従う。

- (17) D. cha gnyis kyi, P. cha nyid kyid で、ここはP. に従う。
- (18) P. には thams cad が欠けており、ここはD. に従う。
- (19) D. 'dod pa, P. 'dad pa で、P. は誤り。
- (20) D. khong khro, P. khod khro で、P. は誤り。
- (21) D. には ro が欠けており、ここはP. に従う。
- (22) D. kyis, P. kyi で、ここはP. に従う。
- (23) D. P. 共に gzugs med pa とあるが、ここは gzugs pa と読むべきである。
- (24) D. gsum las, P. gsum pa で、ここはD. に従う。
- (25) D. bral ba, P. bral ba'i で、ここはD. に従う。
- (26) D. mi skyob pa, P. mi skyod pa で、ここはP. に従う。
- (27) D. las, P. la で、ここはD. に従う。
- (28) D. bcu gsum la, P. bcu gsum pa で、ここはP. に従う。
- (29) D. dang po, P. dang で、ここはP. に従う。
- (30) D. gyi, P. gyis で、ここはP. に従う。
- (31) D. mthong bas, P. mthung ba'i lam gyis mthong bas で、ここは一応 D. に従う。
- (32) D. mi mthun pa, P. lugs dang mi mthun pa
- (33) D. gi, P. gis で、ここはP. に従う。
- (34) D. P. 共に mi rtag pa とあるが、ここは rtag pa と読むべきである。
- (35) D. sngon, P. mngon で、ここはD. に従う。
- (36) D. bya sa, P. byā sa で、ここは P. に従う。
- (37) D. ma gtogs, P. ma rtogs で、ここはD. に従う。
- (38) D. tshad pa nyid, P. tsha ba nyid
- (39) D. bor te, P. por te で、P. は誤り。
- (40) D. kyis, P. kyi で、ここはD. に従う。

註

- (1) デルゲ版：(東京大学文学部所蔵版) 中観部 13 No. 3897 55-1-1 (Ha. 109a1)～159-1-7 (317a7), (台湾版) Vol. 36 No. 3902 324-3-5(409)～334-5-5(481)。北京版：TTP. Vol. 146 No. 5865 4-3-1 (Ño 5b1)～110-3-3(270b3)。
- (2) 拙稿「正量部の四善根位説」『印度学仏教学研究』44巻1号 pp. (96)-(102)。修行体系の概説は、拙稿「正量部の修行階梯—『有為無為決択』第21章「聖諦決択」より見て—」同43巻1号 pp. (121)-(126) を参照されたい。
- (3) 大正蔵24巻665・c。
- (4) 大正蔵49巻16・c, 『十八部論』同19・c, 『部執異論』同21・c—22・a。
- (5) 卍統蔵經(蔵經書院版)第83冊 pp. 0459-0460。小山憲栄編撰『異部宗輪論述記発軔(下)』29。



- (6) 同上 P. 0460。
- (7) 小山憲栄編撰前掲書29。
- (8) 修所断の非随眠に関して、SAV 第二十一章では欲界で所断される非随眠を二十種とするが、これでは食不調性がいずれにおいても断じられなくなり不適切である。それ故第十六章「非随眠决択」の二十一非随眠とする記述 (D. 206b7-207a6, P. 129b1-130a2) に従う。
- (9) 大正蔵24卷665・b-c。
- (10) 卍統蔵經(蔵經書院版)第66冊 P. 0009。
- (11) 『俱舍論』大正蔵29卷124・a。
- (12) 同上124・b-c。
- (13) 同上129・a-b。
- (14) 同上129・c。
- (15) 『俱舍論』大正蔵29卷121・c, 『順正理論』同687・b。
- (16) 『俱舍論記』大正蔵41卷351・c。
- (17) 『俱舍論』大正蔵29卷121・c, 『順正理論』同687・b。
- (18) 『俱舍論記』大正蔵41卷352・a。

